2021年度　副専攻卒業論文

『グレート・ギャッツビー』におけるセルフメイドマン
—F・スコット・フィッツジェラルドのベンジャミン・フランクリン回帰—

2021年2月3日

慶應義塾大学法学部政治学科

人文科学研究会（有光道生）

31855254

小松紗夏

目次

序論　本稿の意義と目的　p.3-4

Ⅰ．アメリカン・ドリームにおける「セルフメイドマン」とは　p.5-14

1-1.　「アメリカン・ドリーム」を探る　p.5-8

1-2.　アメリカン・ドリームを遡って～ジェファソンとフランクリンは何を示したか　p.8-14

1-3.　ジェファソンが示した理想～「万人は平等である」　p.8-11

1-4.　フランクリンが示した夢～セルフメイドマン　p.11-14

II.　『グレート・ギャッツビー』の再考　p.15-21

2-1.　受容のされ方　p.15-16

2-2.　「万人は平等」と商業的セルフメイドマン　p.16-21

Ⅲ　作者が見据えるフランクリン的セルフメイドマン　p.22-36

3-1.　フィッツジェラルドのアメリカン・ドリームに対する両義性　p.22-27

3-2.　フィッツジェラルドがもたらしたギャッツビとフランクリンの対峙　p.27-36

3-3.　フランクリン的セルフメイドマンとしてのギャッツビー　p.27-31

3-4.　フランクリン的セルフメイドマンになり得なかったゆえの失敗　p.31-36

考察・結論　p.37-38

参考文献一覧　p.39-43

序論　本稿の意義と目的

"I still have a dream. It is a dream deeply rooted in the American dream." ［それでも私には夢がある。この夢とはアメリカン・ドリームに深く根付いている。］キング牧師がリンカン・メモリアルでこのスピーチを公衆に届け、人々の胸をうったのは 1963 年 8 月 23 日のことである。公民権運動の真っ只中であった。キングがこの時喚起した「アメリカン・ドリーム」とは、米国の歴史、信念、アイデンティティに深く刻み込まれており、アメリカ人の歴史を深く規定してきたと言っても過言ではないだろう。このビジョンには連続性がある。どの時代、どの脈絡で切り取っても、共通する信念があるのだ。

その一方で、アメリカ文学の最高傑作の一つに挙げられる『グレート・ギャッツビー』では、出世階段(social ladder)を登ることが許されず死に追いやられた男をシニカルに取り上げ、まさにその幻想性を描いた[1]。以降、この小説はアメリカン・ドリームの虚偽性を示す代名詞となっている。しかし、本書が出版されたのは 1925 年であり、アメリカは世界の中でも抜きんでた経済的繁栄を手にしていた狂騒の 20 年代の最中である。大量生産、大量消費の経済構造に転換し、生活水準も向上していた。1922 年を舞台にした当作品は本当にアメリカン・ドリームを完全否定しているのだろうか。それに答えるには、そもそもアメリカン・ドリームが何を意味しているのか歴史化して吟味してみる必要がある。

本稿は、『グレート・ギャッツビー』がアメリカン・ドリームの失敗や近年議論されるようになってきた「アメリカン・ドリームの死」についての物語ではなく、むしろその物質的側面のみならず道徳的側面に注目して、それを批判的に再構築しようとした試みであったことを明らかにする。第一章ではアメリカン・ドリームの定義づけやその内実をとらえ、その精神性の中核であるトマス・ジェファソンとベンジャミン・フランクリンが提示したアメリカン・ドリー

---

[1] フィッツジェラルド、F・スコット『グレート・ギャッツビー』小川高義訳（光文社、2009），Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. New York: Scribner, 2004.

り上げる。第二章では『グレート・ギャッツビー』がいかにその夢に対して曖昧な態度をしめしているか、そしてフィッツジェラルドがどのようにその夢の部分否定を行ったのかを述べる。第三章ではそれまでの議論を踏まえて、この作品がアメリカン・ドリームの否定というよりも批判的再構築を夢想したが、結局その実現の筋道を具体的に示すことには失敗したテクストだと再解釈する。『グレート・ギャッツビー』にはフィッツジェラルドを虜にした精神的な成長としての「アメリカン・ドリーム」への時代錯誤的でノスタルジックな思い入れが、あくまでも朧げな可能性としてのみあらわれていることを明らかにすることが本稿の狙いだ。

I　アメリカン・ドリームにおける「セルフメイドマン」とは

「アメリカン・ドリーム」というフレーズはいまや様々な場面で使われているが具体的に何を指すのかだろうか。『グレート・ギャッツビー』がその破滅を描いたと評されていながら、その具体的なイメージは提示されていない。本章ではこのフレーズの具体像を探る。

1　「アメリカン・ドリーム」を探る

アメリカン・ドリームというフレーズの初出はデヴィッド・グレアム・フィリップスが 1917 年に発表した小説『スーザン・レノックス』であり、次のような一節で使用された。「ファッションとホームマガジンは…何千ものアメリカ人に…普遍的なアメリカの夢と理想である、富を築く可能性を与えてきた」[2]。「ファッションとホームマガジン」への言及は、1920 年代の経済的繁栄によってもたらされた消費社会を大いに表していると言えよう[3]。だが、「アメリカン・ドリーム」がその定義づけとともに一般化したのは、もっと後の 1931 年にジェイムズ・トラスロー・アダムズ発表した *The Epic of America* である[4]。

> すべての階級の人々が、より良く、より豊かで、より幸福な生活を送れるようにという夢であり、それは世界の思想と福祉に我々が果たした最大の貢献である。…能力と努力の結果に応じて、それぞれに機会を与え、すべての人間にとって生活がより良く、豊かで、実りあるものになるべき国。(xiii, xvi)

---

[2] "American dream n. (also American Dream)" *OED Online*, Oxford University Press (December 2021) , <www.oed.com/view/Entry/6342>. Accessed 2 January 2022.

[3] 1920 年代に限らず、消費社会に依拠したセレブ文化は、上向き、下向きであれ、社会的流動性や成功を表し、アメリカの精神を読み取る上で重要な指標であるという指摘もある。Sternheimer, Karen. *Celebrity Culture and the American Dream: Stardom and Social Mobility*. London: Routledge, 2011. p.239~40

[4] Adams, James Truslow. *The Epic of America. First Edition* [electronic resource]. London: Taylor and Francis, 2017. pp.xiii, xvi.

アダムズがここで主張する点は二つある。第一にその夢が「すべての人間にとってより良く豊かな生活」であることだ。同時に、その機会は人の能力と努力の結果(achievement)にかかるものであり、渡辺によれば「能力と努力の結果に従って」という条件からアメリカが厳しい競争社会であると解釈できる[5]。すなわち、万人に開かれた社会で好機を、自ら、個人の努力によってよりよい生活を手にするということだ。これは固定化された階級に根付いた社会構造を持つヨーロッパの対極を成し、その階級社会に辟易としたアメリカ人の夢であるとアダムズは述べる。第二に、アダムズは自己の可能性の実現を主張する。これは単なる物質的な豊さの夢ではなく精神的なものであることを強調するためだと渡辺は指摘する[6]。物質的な成功と結び付けられたアメリカン・ドリームの世俗的な面のみが肥大したことを危惧してのことだと考えられる。アダムズはアメリカン・ドリームの精神性の土台は独立宣言、さらには18世紀の啓蒙主義にあると当書で述べる。

岡本はアメリカン・ドリームを「人間の願望を実現させるため、将来に期待をかける姿勢」と示している[7]。これはあらゆるアメリカン・ドリーム像を取り込もうとしていると考えられ、アダムズの定義に近い。また *Oxford English Dictionary* の第二版（以下 *OED2*）では以下のように定義されている。「アメリカ人が伝統的に目指してきた、民主的で豊かな社会という理想。アメリカの社会的または物質的な価値全般を象徴するための用いられるキャッチフレーズ[8]。」これらが意味するところは似ている。いずれも、包摂できるあらゆる側面を取り込んでいると考えられる。また、アメリカン・ドリームの特質として、それぞれ重複しつつ、八つ挙げられるとしている。1）再出発、2）独立宣言と憲法の精神、3）幸福の追求、4）さまざまの機会とフロンティアの存在、5）物質的成功と道徳的進歩、6）万人の平等、7）困難克服に対する

---

[5] 渡辺利雄『講義 アメリカ文学史　東京大学文学部英文科講義録　第Ⅰ巻』（研究社出版、2007）、118頁。
[6] 同上、119頁。
[7] 川上忠雄編『文学とアメリカの夢』（英宝社、1997）、175頁。
[8] "American, a. and n." *OED Online*, Oxford University Press(1989), <https://www-oed-com.kras1.lib.keio.ac.jp/oed2/00007153>. Accessed 2 January 2022.

国民の能力、8）人権の保障である[9]。この主張もまさにこのあらゆる側面を包摂した夢の内実である。アメリカン・ドリームが時空を超えて、様々な意味合いを取り込み、多義的・複層的になりながら、連続性を抱えた、一般化した概念として形成されていったことがうかがえる。

Oxford English Dictionary の第三版(以下 *OED3*)におけるアメリカン・ドリームの定義は、「アメリカに住むすべてのものが、勤勉、決断力、進取の精神によって、成功と繁栄を成し遂げる機会を均等に持つべきだという理想」である[10]。山中は「出身や階級を問わず、才能と努力さえあれば経済的・社会的成功をもたらす」ものであると定義づけている[11]。これは *OED3* の定義に近い。いずれも機会が万人に開かれた社会で経済的な成功を得るという点に重視されている。これは、「セルフメイドマン」が指すものに酷似しているといえよう。「セルフメイドマン」の定義もまた多義的であるが、本稿ではその代名詞とされるベンジャミン・フランクリンと *OED3* での定義を取り上げる。フランクリンが提示した像は、自己形成によって出自や階級にかかわらず成功を手にすることだが、*OED3* よりも広義であり、よりアダムズに近いと考えられる。これに関しては次節で述べる。*OED3* によれば、セルフメイドマンとは次のように形容されている。「偶然性に左右される生い立ちではなく、個人の努力や苦労によって富や地位などを達成した人。貧しい背景から来た人[12]。」この「偶然性」というのは、自らの力で変えられないもの、先天的なものともいえよう。これから読み取れるセルフメイドマン像は、先天的な条件（出自等）によらず、後天的な条件（個人の努力）によって、不遇な環境から富や名声を獲得した人間を指す。それはアダムズが危惧した世俗的な面のみであり、*OED3* や山中

---

[9] 佐々木隆「『冬の夢』から『アメリカの夢』へ——*The Great Gatsby* を中心に——」『同志社アメリカ研究』第 21 号、1985 年、53 頁。

[10] Oxford University Press(2021), *op. cit.*

[11] 山中祐子「*The Great Gatsby* にみる人物像」『広島修大論集』第 50 巻第 2 号、2010 年、151 頁。

[12] "self-made man n." *OED Online*, Oxford University Press (December 2021), <www.oed.com/view/Entry/175345>. Accessed 3 January 2022.

の定義からこの物質的な意味合いがアメリカン・ドリームとして受容されていることが読み取れる。

すなわち、アダムスの定義と *OED3* の定義を比較しても、「アメリカに住むすべてのもの（all our citizens of every rank, every citizens of the United States)」を対象としていることが読み取れるが、二つのアメリカン・ドリーム像が浮かび上がる。アダムズが提示したアメリカン・ドリームは広義のものであると言えよう。アダムズは佐々木が提示した八つの要素において、2）独立宣言と憲法の精神（それに付随して幸福の追求と万人の平等も該当する)および5）物質的成功と道徳的進歩に、とりわけその道徳性には重きを置いていることと考えられる。そして狭義の物質的な成功のみと結び付けられた夢である。前者の定義は後者の定義を包摂するものであり、後者はセルフメイドマンを指すものである。それぞれの夢の基盤となる概念の省察は次節で行う。

2　アメリカン・ドリームを遡って～ジェファソンとフランクリンは何を示したか

（1）ジェファソンが示した理想～「万人は平等である」

ジェファソンの理想が最も明確に表現されているものは、建国の父の意図が組み込まれた独立宣言や合衆国憲法であり、その詳細は手記『ヴァージニア覚書』や 1801 年の大統領就任演説から推察される。

ジェファソンが草稿執筆に当たった独立宣言でアメリカの理想の形成に大きく影響を及ぼしたのは次の文言である。「...すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている[13]。」ここで夢の根幹をなすものは、1)万人の平等、2)幸福の追求である。

---

[13] アメリカンセンタージャパン「独立宣言」
<https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/2547/>. アクセス日：2020.12.17.

第一に万人は平等である[14]。これは合衆国憲法の前文における「より完全な連邦（a more perfect union）」が示すものであると考えられる。「より完全な連邦」が何を指すかには諸説あるが、本稿では人民が憲法を制定し、政府を作り、自ら統治すること、すなわち共和主義であるという論考に沿う。ジェファソンは、ヴァージニア州憲法を修正すべきことを説いたある手紙の中で、憲法を共和主義的にすることで、自治を確保することを、憲法修正の目的として述べている[15]。ジェファソンが理想としていたのは英国から切り離された自治であり、その内実は、中央集権体制、貴族による官僚制から脱却し、各州が権限をもち、かつ自らの統治を可能とするような共和主義的な選挙システムである。また、明石によれば、ジェファソンは当時、理想としていた社会、統治形態、共和主義について国民の間に共通の理解があったと捉えていたようだ[16]。よってここでは共和主義の解釈の差異(大西洋共和主義論、古典的共和主義論等について)は触れない。この貴族による官僚制から脱却した共和主義が不可欠としていたものは、万人の平等性である。つまり、「より完全な連邦」は万人の平等を前提としている。万人の平等という理念は、ジェファソン自身の演説でも示されている[17]。以上よりジェファソンの理想の根幹をなしたものに、「万人は平等」であるという思想があったことが推察される。

一方、ジェファソンの「万人は平等」思想の虚像性が、彼が奴隷所有者であったことから述べられることが多い。彼の平等思想は政治家としての建前でしかないという指摘だ。まず、当時「万人（all men）」が指していたものは、白人男性だけであった[18]。これを謳うことでジェファソンが目指したものは、奴隷の解放よりもまず先に貴族が独占する官僚制度から脱却し

---

14 アメリカンセンタージャパン「アメリカ合衆国憲法」<https://americancenterjapan.com/aboutusa/laws/2566/>. アクセス日：2020.12.17.

15 清水忠重「トマス・ジェファソンの共和制論」『神戸女学院大学論集』第 43 巻第 2 号、1996 年、21-2 頁。

16 明石紀雄『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念』（ミネルヴァ書房、1993）、147-8 頁。

17 Jefferson, Thomas. *The Papers of Thomas Jefferson Volume 33 ; 17 February to 30 April 1801.* Princeton: Princeton University Press, 2018. p.142-2.

18 Cullen, Jim. *The American Dream : A Short History of an Idea that Shaped a Nation.* New York: Oxford University Press, 2003. p.51-2.

た、善き農夫をも包括した政治制度であるためである。またジェファソン自身がその手記をもって奴隷制度を否定している。『ヴァージニア覚書』においてジェファソンは奴隷制が共和主義に相容れない制度であると書き連ねている[19]。「万人」の範囲は当時狭いものであったが、ジェファソンがその対象となる人々の平等性を本質的に理想と捉えていたことに変わりはなかろう。

第二に幸福の追求である。この幸福追求というものは、現在に至るまで明確な定義づけはなされていない。1906年のウィスコンシン州最高裁で行われた訴訟では、「幸福の追求とは、疑うところなく、私的財産の保護だ」とされている[20]。これは、ジェファソンが参照したとされるロックの『統治二論』において人間にとって大切なものは生命、自由、資産とみなされているために、このような解釈も流布したと考えられる。執筆してからは時が経つが、ジェファソンは公的生活から身を引き、隠棲していた時には、「肉体的苦痛のないこと、精神的苦悩のないこと、心の平和」を指すと後に述べている[21]。よって、内なるものであると考えられる。また彼は幸福が個人のレベルにとどまるものではなく、社会で広く享受されるものである必要があったと考えていたため、政治目標としての性質も帯びていた。これらは共和主義の前提条件として不可欠であり、その理念に基づく政体の樹立には意識の変革も必要とされた。それには市民的美徳（勤勉、誠実、質素など）の涵養が不可欠であった。それはウッドがいうところの道徳的改革であり、これはフランクリンが生涯をかけて実践を試みた[22]。次節でさらに述べる。

（2）フランクリンが示した夢～セルフメイドマン

---

[19] Jefferson, Thomas. *Notes on the State of Virginia, edited with an introduction and notes by Frank Shuffelton* [electronic resource]. New York: Penguin Books, 1999. pp.176-7.

[20] Stanley N. Katz, "Republicanism and the Law of Inheritance in the American Revolutionary Era", *Michigan Law Review*, Vol.76 No. 1, (1977) p.6

[21] 明石、前掲書、226頁。

[22] ウッド、ゴードン・S『ベンジャミン・フランクリン、アメリカ人になる』池田年穂、金井光太朗、肥後本芳男訳(慶應義塾大学出版会、2010)。

フランクリンの著書『自伝』はアメリカ人の自己確認、自己形成の過程を忠実に記録したものであり、また典型的なアメリカの現象であるセルフメイドマンの成長と、平等な機会によって家柄や学歴とは無関係に成功する可能性を持った社会を描いている。「勤勉と節約の効用を説いて世俗的な聖王を治めた秘訣を明らかにする成功物語であり、立身出世のバイブルである」と川上も指摘している[23]。フランクリンが体現したアメリカン・ドリームは、アメリカ資本主義の産物であり、セルフメイドマンとして理想化されている。*OED3*が示したアメリカン・ドリーム、セルフメイドマンはフランクリンに遡ることができると言えよう。

渡辺によれば、フランクリンが「自己形成(self-made)」として提示していたものは、「過去からの伝統や習慣などによって規定されることなく、未来に向かって、自由に、自分に最も適した職業、活動の場を求めること」であるとされている[24]。またアメリカ人は、貧しい環境の出自のものでも、独力でそのような境遇を克服して、社会の上層部の一部になることをセルフメイドマンと捉えていたと指摘している。つまり、*OED3*が提示するところと合致する。また、自己形成という点で特筆すべきは、フランクリンの下克上である。彼は『自伝』において、非常に貧しい家に生まれ育ち次第に自助努力の結果富を得て成功したと自身の半生を回想する。決して最も裕福な身分ではなかったものの、フランクリン家はいわゆる中産階級であり、明日の暮らしは常に保障された、安泰した生活を送っていた。彼は自らの著書を通して立身出世物語を築き上げた[25]。*OED3*で指摘された貧しい境遇からの立身出世は実際のフランクリンを指すものではなく、彼自身が『自伝』を通して作り上げたフランクリン像である。科学者、実業家、政治家、様々な顔を持つフランクリンが努力を通してさらなる成功を手に入れたことには違いなく、またその自己形成の過程はまさにセルフメイドマンである。この自己形成の夢は、

---

[23] 川上、前掲書、50頁。
[24] 渡辺利雄『フランクリンとアメリカ文学』(研究社出版、1980)、207頁。
[25] 竹腰佳誉子「ベンジャミン・フランクリンの成功と彼の印刷ネットワーク」『人間発達科学部紀要』第6巻第2号、2012年、203-210頁。

ジェファソンの夢、独立宣言の概念とも共振し、また19世紀以降の超越主義者エマソンが定式化する自己信頼(self-reliance)を先取りする、アメリカ的な概念として根付いていくと巽は指摘している[26]。ジェファソンがフランクリンを評価したのは、フランクリンが出自や階級によらない「万人に開かれた社会」でこそ成功への手段となる立身出世の精神で自らの道を切り開き成功を手にしたからである。フランクリンは「万人は平等である」というジェファソンの理想と親和する。

一方、フランクリンを金の亡者と捉えた批判は絶えず、『グレート・ギャッツビー』を夢の破滅と指摘する研究の多くは、利潤追求や物質至上主義の失敗を論じており、中にはそれをフランクリン的な夢の破滅と形容しているものもある。フィッツジェラルドはフランクリンが提示した西洋の功利主義にギャッツビーが心酔し失敗したといった指摘である[27]。このような批判は当時から存在した。D.H.ロレンスは利潤追求を軸とした禁欲的な精神を、森の中の人間であったアメリカ人は有刺鉄線の檻の中に機械的に支配されてしまったという。しかし、このような文学者の批判は「フランクリンの虚像、歪められたフランクリン像」に基づくものだと指摘している[28]。

フランクリンをセルフメイドマンたらしめる要素は、彼が階級の障壁を超え経済的成功を手に入れたからだけではないだろう。フランクリンが「すべてのヤンキーの父」と呼ばれるほど親しまれていたのは、富の蓄積だけでなく、その精神性、内実が伴っていたからである。これは第1節で取り上げた八つの特質のうち、道徳的進歩に当たるといえる。「自由な運命の洗濯、未来に向かって無限に成長してゆく若者のエネルギー、主体性、肯定的かつ積極的な生活態度」に『自伝』の肝要がある。フランクリンは内なる善を備えた「善き市民」であることを

---

26 巽孝之『アメリカ文学史　駆動する物語の時空間』（慶應義塾大学出版会、2003年）、50頁。

27 Lehan, Richard. "Focus on F. Scott Fitzgerald's *The Great Gatsby*: The Nowhere Hero," *American Dreams, American Nightmares*, 1970.

28 渡辺（2008）、前掲書、144頁。

理想としており、道徳的完成を目指す人生設計に軸をおいていたとウッドも指摘している[29]。徳を身につけて実践を積み重ねることで人々は「善き市民」となることができ、そうなれば富の蓄積も結果としてもたらされるというビジョンである。道徳的完全性を成し遂げることは、経済的な成功だけに止まらない「成功」と幸福が得られるのだ。フランクリンが唱導したものは、先述の物質的追求と表裏一体をなす精神的な夢の追求、可能性の探究であると、川上も指摘している。この精神的な夢をフランクリンは『自伝』で 13 の徳目として表している。それは、1)節制 2)沈黙 3)規律 4)決断 5)倹約 6)勤勉 7)誠実 8)正義 9)中庸 10)清潔 11)冷静 12)純潔 13)謙虚であり、この順に列挙されている。フランクリンは一つずつ身につけ最終的に 13 つ全てを習慣化すべきだと示した。羽鳥によれば、フランクリンは著書『富にいたる道』においても、勤勉、規律、節制等の実践を通して富の蓄積が結果として得られると説いている[30]。またフランクリンはこの自己点検のために週間予定表を作り、継続できるように努めていた。フランクリンは、この徳目の実践という精神的な成功を成し遂げることが人生の目標であり、それを成し遂げれば、また物質的な成功も得られると考えていた。この実践を通して得られる道徳的完全性にフランクリン自身が至ることはないが、晩年、彼はその努力過程に意味を見出しているとウッドは指摘する[31]。その努力をしなかった時よりもよりよい人間になれた点で、無意味ではないと述べている。ここにも、本質的な成功がその内面性、精神性に依拠するものであることが読み取れる。つまり、物質的な成功と同時並行に掲げられつつも、精神的な成功(「善き市民」となること)が本質的な夢であり、その追求をすることで経済的にも成功できる、というフランクリンが提示したセルフメイドマンであると推察される。

---

29 ウッド、前掲書、250 頁。
30 羽鳥修「ベンジャミン・フランクリンの『世俗主義』と『非世俗主義』—アメリカにおける近代的文化思想の起源」『駒沢女子大学研究紀要』第 13 号、2006 年、189-203 頁。
31 ウッド、前掲書、251-2 頁。

以降、フランクリンが提示した、内なるものをも伴っているセルフメイドマンをフランクリン的セルフメイドマンと形容し、*OED3*で提示された厳しい境遇から経済的成功、名声を得るという物質主義なセルフメイドマンを商業的セルフメイドマンと呼ぶ。第1節で取り上げたアメリカン・ドリームと同様、二つのセルフメイドマンがあり、より広義であるものがフランクリン的セルフメイドマンである。

II. 『グレート・ギャッツビー』の再考

前章ではアメリカン・ドリームおよびセルフメイドマンの広義（精神性と物質的側面）と狭義（物質的側面のみ）を取り上げ、それに際してジェファソンとフランクリンの理想を論じた。本章ではまず当作品が否定的な意味合いで受容されていることを確認したのち、いかにギャッツビーが商業的セルフメイドマンとして失敗したかを明らかにする。その立証のため、ギャッツビーが物質的成功を手にしたことおよびジェファソンが示した万人の平等性という理想が否定されたことを論じる。

1　受容のされ方

『グレート・ギャッツビー』は1925年4月10日に発表されたフィッツジェラルドの3作目の長編小説である。その発表から一世紀経とうとしている今においても、アメリカ文学の中でキャノンとして扱われ、また1920年代の世相を大いに表しているとして文化史における価値も非常に高い。当時においても15万部以上が軍隊用版として出版され、またパクスアメリカーナを迎えた50年代には長らくアメリカ人のナショナルアイデンティティの根幹をなしているアメリカン・ドリームへの興味からまた広く読まれることになる。

この作品はしばしばアメリカン・ドリームの失敗、その幻想性を表す作品として据えられている。「『グレート・ギャッツビー』がアメリカン・ドリームの否定であることは、作品の研究だけでなく、広く人々に支持されている考えである。その一例として「グレート・ギャッツビー曲線」を挙げる。クルーガー（オバマ政権下で大統領経済諮問員会の委員長を務めた経済学者）が2012年に名付けた事象である。この曲線は軸に所得格差を表すジニ係数をおき、y軸に世代間モビリティ（弾力性）を据え、所得格差と世代間モビリティの相関を国ごとに示したものである。所得格差が大きいほど世代間モビリティが弱い、つまりは所得格差の大きい国は階級の固定化が存在することが示されている。この曲線に『グレート・ギャッツビー』の名を

当てた意図に、「裕福なものは裕福であり続ける」という階層の固定化という意味を持たせることがあったと、同僚クラメールは述べている[32]。

一方で、文学史に中に組み込まれても、当小説はアメリカン・ドリームの崩壊に結び付けられているものである。ランダルはギャッツビーがアメリカン・ドリームないしはセルフメイドマンの象徴だと語る[33]。「『アメリカの夢』に対する批判として、この作品は検証されてきた。」と岡本も述べている[34]。川上もまた、「アメリカの夢の実現と挫折と衰退の物語」とみなしている[35]。巽は「典型的なアメリカの夢を物語った、代表的なアメリカの悲劇」だと述べている[36]。

2　「万人は平等」と商業的セルフメイドマン

ギャッツビーはアメリカン・ドリームの失敗の象徴として据えられているが、彼は経済的には巨万の富を築き上げている。ギャッツビーはその点でアメリカン・ドリームの一側面を達成したが、当作品がアメリカン・ドリームの破滅の象徴として捉えられているのは、富を得ても社会階級は固定化されているという社会的流動性の欠如である。すなわち、経済的な成功を達成していながら、階級の壁を超えられなかった点に、商業的セルフメイドマンの失敗が描かれていることが多くの先行研究でも示されている。岡本は当作品が否定したアメリカの夢は、「万人にとっての機会均等、出自に関わらず人生の階段を登ってゆく願望」と述べている[37]。サ

---

[32] Corak, Miles. "How *The Great Gatsby* Curve Got Its Name", WordPress.com (4 December 2016), <https://milescorak.com/2016/12/04/how-the-great-gatsby-curve-got-its-name/>. Accessed 23 December 2021.

[33] Randall III, John H. "Jay Gatsby's Hidden Source of Wealth", *Modern Fiction Studies* Vol. 13, No. 2 (Summer 1967), p.257.

[34] 川上、前掲書、178 頁。

[35] 同上、29 頁。

[36] 巽孝之『アメリカ文学史　駆動する物語の時空間』（慶應義塾大学出版会、2003）142 頁。

[37] 川上、前掲書、178 頁。

ミュエルズはギャッツビーの死がアメリカン・ドリームの幻想性を究極的にしたと指摘している[38]。この夢は作中の様々な場面で否定されている。それはギャッツビーとデイジーらが対照的に描かれていることから読み取れる。

第一に着こなしである。彼はデイジーを自宅に招いた際、色とりどりのシャツを部屋中に投げ上げ、机の上を埋め尽くすように放り出す。「春と秋に、季節の品をとりそろえて」送ってもらっているという。

> つややかなリネン、厚手のシルク、みごとなフランネルが、はらはらと広がって色あざやかにテーブル上を埋めつくす。賞められて調子に乗ったギャッツビーは、さらに何枚も投げ出して、重なる布地がふっくらと盛り上がった。ストライプや渦巻やチェックのシャツである。サンゴや青リンゴ、ラベンダー、淡いオレンジの色に、藍色のモノグラムが入っている。(149-50)

毎シーズン、英国から調達していることや、高級な素材、珍しい色をしたシャツであることから、彼の富が描かれているといえる。それをみたデイジーがあまりの美しさに感極まって涙を流すことからも、その希少価値がうかがえる。このシャツはデイジーへの欲望を具現化するために買ったものであり、デイジーへの愛が現れているといえよう。かつこのシーンでは彼女への愛を示す贈り物として作用している。それとまた対照的であるのはトムがデイジーに送ったものである。35万ドルの価値のある真珠の首飾りを結婚式の前日に贈る。ここで色の対比がみられる。

加えてギャッツビーは貧しかった青年期には「緑色の破れたジャージーにキャンバス地のズボン」(158)を着ていたので、布地の素材や色を細やかに提示したシャツを物質的な成功を掴んだといえる。終盤にプラザホテルに向かった時にも、ギャッツビーはピンクのスーツに身を纏

---

[38] Samuels, Charles Thomas. "The Greatness of 'Gatsby'", *The Massachusetts Review,* Vol. 7, No. 4 (Autumn, 1966), p. 787

っている(198)。これに対してトムはオックスフォード（つまりは上流階級）の出の者の服装ではないと声を荒げる。トムの服装は具体的に描かれていないが、同じ階級に属するデイジーとジョーダンの着こなしは何度も描写されている。ジョーダンとデイジーが着ていた服の描写で白色を用いた表現は 47 回使用される[39]。一般的に純潔や潔白、権威や高貴を表すものであり、山中が指摘するように二人を描写する際は権威に加えて、物憂いさ、優柔不断さも表されているが、由緒のないギャッツビーが色鮮やかに表現されるという対比には十分は作用を持つと考えられる。

次に暮らしている空間である。ギャッツビー、ブキャナン夫婦ともにロングアイランドに邸宅を構えており、それだけでも富を所有していることが読み取れる。しかしそれでも、そこに確固たる対比が生じている。ブキャナン家はイーストエッグに暮らしており、そこは由緒のある富裕層の住処であり、反対にウェストエッグはギャッツビーなどの成金が住むところであった。ギャッツビーの隣にニックが暮らせていることもその格付けを印象付けさせている。またその対照性は彼らの邸宅からも読み取れる[40]。「意匠を凝らした美邸は私の予想を上まわった(Their house was more elaborate than I expected)」(17)と形容しており、ブキャナン邸のベランダは、「まるで星空を買ってきたように、贅沢にきらめいて見えた。」(243)と表現されている。その緻密な作りと美しさにニックが感心していることが読み取れる。それに反して、ニックはギャッツビー邸を「ノルマンディーあたりの市庁舎を模したとしか思えない」(15)とその大きさに驚きながらも皮肉めいて表現している。二つの邸宅をみたニックの印象の差異もまた、階級による溝を深める作用を持っている。

---

[39] 山中祐子「The Great Gatsby における色彩のイメージ」『広島修大論集』第 49 巻第 2 号、2009 年、220 頁。

[40] ニックは中西部の出身であり「キャラウェイ家と言えばちょっとした名門」(11)とあるように、ニックもギャッツビーと同じような新興層ではなく、ウェストエッグの住民の典型とは異なる。

最後にパーティの行われ方である。トムやギャッツビーがニックを招待したパーティーは以下のように描かれている。トムは作中でニックをパーティーに2回誘う。1回目はデイジー、ジョーダンも交えたブキャナン邸でのディナーである。ギャッツビーのパーティーの対極にあるものだと考えられる。1回目のパーティは静かでこぢんまりとした様相で行われていることが読み取れる。ディナーが用意されたベランダまで体を「のんびり進めて(languidly)」(25)向かっていることからゆったりとした造作が、「テーブルに四本のキャンドル」(26)といった描写からその四人が顔を合わせて食事を共にするという親密な空間であることが読み取れる。2回目はマートルらとマンハッタンのアパートで行ったものである。トムはマートルに手をあげてしまうほど泥酔するものの、ギャッツビーとは対照的に描かれていることが挙げられる。「たいして広くはない居間と食堂と寝室、および浴室である。ゴブラン織りのソファ・セットが大きすぎて、居間に入ってから歩きまわる余地がない」(51)と描写されている。小川は「たいして広くはない」と訳出しているが、居間、食堂、寝室それぞれに小さい(small)がかかっており、狭さが強調されていると考えられる。二つのパーティはともに狭い空間の中で少ない人数で行われたものであるといえる。次にギャッツビーが示したものである。ギャッツビー邸でのパーティは派手で豪華に描かれている。「夏の夜には、隣家からの音楽が絶えなかった。青々とした庭から庭へ、若い男女が蛾の群れのように行き来して、ささやき声とシャンペンと夜の星に包まれる。」(66)とニックは振り返る。この描写からまず、ジャズ演奏がかなりの音量で行われていたこと、かなりの人数が訪れており、それぞれが好きに過ごしていることから開放的な空間であることがうかがえる。また、二週間に一回、テントや電飾の模様替えを行っている(67)ことからいかに大掛かりなものであるかが読み取れる。出された食事を「道化の衣装のような模様になったサラダ(salads of harlequin designs)」(67)と皮肉めいて形容しており、成金的な品のなさにニックも気がついているといえよう。加えて、どちらも参加したジョーダンはギャッツビーが主催するようなパーティを気楽さゆえに好む。小さいパーティは全てが「丸見え(there isn't

any privacy)」(83)ゆえに息苦しさを覚えると述べている。ここに両階級の明確な違いが見えるといえよう。

ギャッツビーの服装や邸宅、パーティなどから彼が富を築き上げたことが読み取れるが、同時にトムやデイジーらと対照的に描写することで階級による溝が依然として消滅していないことを印象付けさせている。

物質的成功を手にしても階級は超えられないことがあり、この社会的流動性の欠如を、ギャッツビーを通して示唆されている。つまり、金銭的な成功という一面は成し遂げられても、出自や階級によらずに活躍するという、いわば「万人は平等である」ジェファソン的アメリカの理想を作者が否定していると考えられる[41]。これは作者の階級意識の反映である。作者は父方、母方の家系ともにアイリッシュにルーツを持つ。父方(フィッツジェラルド家)は移民してから二百年という古い歴史を持っており、その家柄に父は誇りを持っていた。祖先にアメリカ国歌の Star-Spangled Banner を作詞した Francis Scott Key もいる。反対に母方(マッキラン家)は、1842 年に移民してきたばかりであり、家庭内で家柄は対照的であった。母方の祖父は地元有数の実業家にまで経済的に自立するものの、父方はマッキラン家を新興的な成金として軽蔑していた[42]。すでに幼少年期に作者は階級意識を培う。この階級意識はプリンストン大学時代に増幅する。当時、プリンストンは、人種的にも経済的にもかなり閉鎖的であった。作者も決して貧乏な家庭ではなかったものの、同窓生のような大富豪の家庭ではない[43]。彼は東部きっての名門大学の学生でありながら彼が抱いた階級意識は自らを特権側に置いたものではなかった。特権階級と自分との間に厳然と存在するその壁が作者の抱いた階級意識だと高橋も指摘している[44]。

---

41 川上、前掲書、183 頁。

42 渡辺利雄『講義 アメリカ文学史　東京大学文学部英文科講義録　第 II 巻』（研究社出版、2007）、270-1 頁。

43 Curnutt, Kirk. *The Cambridge Introduction to F. Scott Fitzgerald* [electronic resource]. Cambridge: Cambridge University Press, 2007. Ch. 1-2.

44 高橋美知子「F. Scott Fitzgerald の作品における人種表象」『福岡大学研究部論集. A, 人文社会編』第 13 巻第 5 号、2014 年、108-9 頁。

彼は裕福であるが故に保証された豊かで安泰な生活を羨望するとともに、その虚しさを知る。ニックはこの造形であると推察される。ニックもイェール大学を卒業していながら成り行きで証券会社に勤めており、同窓生のトムとは異なる。

以上より作者が深い階級意識を持っており、それに対して不満を抱えていたことも読み取れる。そして、その経験をもとに、固定化されていたために超えられなかった階級の壁を表している。この階級意識はまた作者が意図的に組み込んだものであるといえる。トムとギャッツビーを対照的に描き、またデイジーとトムの同質性を描くことでその壁を示唆し、商業的セルフメイドマンの失敗を表現していると考えられる。

Ⅲ. 作者が見据えるフランクリン的セルフメイドマン

前章では、ギャッツビーが富の蓄積という物質的な成功を手にしていながら階級の壁が依然として残り続けるという描写から商業的セルフメイドマンの失敗を読み取れるかを述べた。本章では、作者がギャッツビーを通してアメリカン・ドリームを全否定したのではなく、商業的セルフメイドマンに体現されたその物質主義的側面への拘泥を否定し、フランクリンが理想化した、物質主義面、精神性をともに備えたセルフメイドマンの再構築を狙っていたことを示す。

1 フィッツジェラルドのアメリカン・ドリームに対する両義性

前章において、作者は自身の生い立ちから階級意識を深く持っており、それが社会的流動性の否定に至らせことを指摘した。だが、これを理由に作者がアメリカン・ドリームを全否定したというのは正しくない。どういうことだろうか。以下の描写を取り上げる。

「青々とした芝生にたどり着くまでには、長い道のりがあったはずだ。ここまで来たら、ほんの少しで夢に手が届きそうで、つかみ損なうことがあるとは考えなかっただろう。」(295)この描写からニックはギャッツビーの夢が未完成でありつつも、ギャッツビーの経済的成功（ただし階級の克服は含まない）を夢の一部であると捉えていることがわかる。

また、作者は自身をニックと重ねて、シニカルに描いているとされているが、同時にギャッツビーとも重ねていたと推察される。作者の大学時代の友人であるエドマンド・ウィルソン(Edmund Wilson)は彼を次のように評した[45]。

[45] Wilson, Edmund. *The Shores of Light : A Literary Chronicle of the Twenties and Thirties.* New York : Farrar, Straus and Young, 1952.

彼はアイルランド系らしくロマンチックだが、同時にロマンスに対して皮肉屋だ。彼は法悦に浸るというのに冷ややかであり、リリカルでありながらしんらつである。彼はプレイボーイを自ら演じていながら、それは彼自身が小馬鹿にするような人間であった。

ギャッツビーというアメリカン・ドリームの象徴に対して、ニックの視点を通して作者自身のロマンスに対する皮肉を示しており、それは夢の幻滅という否定ではなく、彼の二面性の一部であると考えられる。ニックは作者の客観性、冷静さを、ギャッツビーは作者が抱くロマンチシズムや夢、人生への期待を表していると岡本は主張している[46]。その客観性とは前章で示した、固定化された階級という社会的流動性の否定である。ギャッツビーの描くロマンチシズムは、それへの無垢なまでの挑戦である。サミュエルズも作者が自らをギャッツビーに重ねていたことを指摘している[47]。

前章で作者はニックに自らを重ねているとしたが、ニックはギャッツビーの魅力を何度も語っている。つまり、作者もまたギャッツビー、そして彼が象徴するアメリカン・ドリームに惹かれていたと考えられる。物語の初めにニックがギャッツビーを初めて回想するシーンである。ニックは「ギャッツビーは華麗なる人物だったと言えよう。」(11)と振り返る。「華麗なる」と小川は訳出しているが、村上は「驚嘆すべきもの」と、野崎は「何か絢爛とした個性があった」と訳出している[48]。原文は“there was something gorgeous about him”であり、ニックもその魅力がわからぬまま心酔していく様子が描かれているため、野崎訳がより作者が形容しようとしていたニックがギャッツビーに心惹かれる様子に近いと考えられる。

---

46 岡本紀元「Scott Fitzgerald の“double vision”について」『甲南女子大学研究紀要十周年記念号』第 11,12 合併号、1975 年、167 頁。

47 Samuels, *op. cit*, p.783.

48 ここでは小川訳よりも適した役があると考えられたため次の二版も参照にした。F・スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャッツビー』野崎孝訳（新潮文庫、1974）。F・スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャッツビー』村上春樹訳（中央公論新社、2006）。

また、ギャッツビーの笑顔にもその魅力は描かれる。彼の笑顔は作中たびたび描かれているが、「どこまでも安心させてくれる表情」(80)「こっちだけ見ていてくれるというような、格別のありがたみがある」(81)とニックは彼の笑顔に心酔する。彼の笑顔こそ、そのカリスマ的な神秘性、魅力を象徴するものであり、あくまでもそれは内面の徳とは異なりつつも、アメリカン・ドリームの物質的側面が朽ちない魅力を持ち続けていることを裏付けていると言えよう。

次は、ニックとギャッツビーが言葉を交わす最後のシーンである。ギャッツビーはマートルを轢いたデイジーを心配し、彼女の家を訪れるも入れずにいた。そこにニックが現れ、ギャッツビーをこのように褒める。

> 「あいつら、腐りきってる」と、私は芝生に大声を発した。「あんた一人でも、あいつら全部引っくるめたのと、いい勝負だ。」
>
> こう言っておいてよかった、今でもそう思っている。(251)

この後にもギャッツビーのその姿勢を、「壊れることのない夢 (incorruptible dream)」(251-2)とニックは形容している。すなわち、ニック、そしてフィッツジェラルド自身も由緒ある上流階級であるトムやデイジーの富に魅力を感じていながら、同時に彼らよりもギャッツビー自身と彼の無垢なまでの向上心に惹かれていたと考えられる。

以上より、作者がアメリカン・ドリームの破滅ではなく、それ自体を信じていたことが推察される。ではなぜアメリカン・ドリームの真っ向からの否定として捉えられるような作品に仕上げたのだろうか。それは当時広く抱かれていたアメリカン・ドリーム像が作者の信じるアメリカン・ドリーム像と乖離していたからだと考えられる。ビューリーによれば、作者がアメリカン・ドリームをモチーフにした作品はジャズ・エイジの精神性を描くにとどまらず、アメリ

カの歩み (American experience)の本質をつくものである[49]。作者が 1920 年代に好まれていた物質面のみでの成功を否定しながらもアメリカン・ドリームを抱き続けていたといえる。

ハーンは作者の意図をアメリカン・ドリームの誤解を解くことだと考察している[50]。作者にとってアメリカン・ドリームは美しいものであると同時に異様なまでに間違えられ曲解されたものであり、また作者はその虚偽性ではなく、その実現の確約や保障がなかったとしてもその可能性はあることを指摘したという。

フィッツジェラルドはロックフェラーやカーネギーなど当時出自によらないところから富を得ていた人々をアメリカン・ドリームの輝かしい象徴であると据えながら、同時に彼らを否定的に捉えていたようだ。それは彼らがその経済的成功を重視するあまりに、過剰な搾取や拝金主義につながっていたためだ。

だが、小説の結びにもニックのシニカルな態度が示されており、ハーンはそこから読み取れる泥臭い精神性 (unrelenting spirit)こそがアメリカン・ドリームだと指摘する[51]。

> それ[緑の灯火すなわち夢]が年々遠ざかる。するりと逃げるものだった。いや、だからと言って何なのか。あすはもっと速く走ればよい、もっと腕を伸ばせば良い……そのうちに、ある晴れた朝が来て——
>
> だから夢中で漕いでいる。流れに逆らう舟であり。そして、いつでも過去へ戻される。(295)

この描写にハーンは、幾度なく挑戦をし続ける姿勢に夢の本質を見出している。遠ざかっているようでも、それに関わらず追い求め続けることが、アメリカ人が抱き続けていた精神であ

---

[49] Bewley, Marius. "Scott Fitzgerald's Criticism of America", *The Sewanee Review*, Vol. 62, No. 2 (Apr. · Jun., 1954), pp. 223-246.
[50] Hearne, Kimberly. "Fitzgerald's Rendering of a Dream", *The Explicator*, Vol. 68, No. 3, (2010) p.189.
[51] *Ibid.*, p.193.

ると指摘しているのだ。フロンティア精神に通ずるものを見出そうとしている。しかし、フロンティア精神に作者が夢の可能性を見出していたならば、そのような向上心を持っていたギャッツビーの死と矛盾する。そのため、ハーンが提示した、ニックを通してその可能性を指摘したとは考えにくい。フィッツジェラルドは過去の精神性に夢を見出したとリーハンも指摘している[52]。それはアメリカという未開の地で得られる可能性にかけるという姿勢であった。これもフロンティア精神を示唆しているのだろう。しかし、フィッツジェラルドがアメリカン・ドリームの誤解を解こうとしていたというハーンの指摘を立証するには、フロンティア精神ではなく、むしろフランクリン的セルフメイドマンではないかと考えられる。

カラハンによれば、作者が追い求めたアメリカン・ドリームは独立宣言、すなわちジェファソン的なアメリカン・ドリームに根付いている[53]。それは独立宣言で認められた不可侵の幸福追求権であり、個人が尊重され万人に開かれた社会を指しているとうかがえる。この幸福追求権が示唆するものは多義的であり、それは時として財産権ないしは富の追求と解釈される時もあった。だが、カラハンはその物質的な側面に含まれないあらゆるものが「幸福の追求」に含意されるのであり、この夢の実現を作者が意識していたと考察している。カラハンはその「万人」に当時黒人やネイティブアメリカン、奉公人が含まれていなかったが、徐々にその範囲を広げていったと譲歩しつつその夢としての特質を見出している。しかし、ギャッツビーが階級の超越に失敗したことからジェファソンが示した万人は平等であるという理念が否定されていると読み取れる。「幸福の追求」に含まれるものは、万人の平等性ではなく、内省的な精神性、すなわちフランクリン的セルフメイドマンの道徳的側面ではなかろうか。

---

[52] Lehan, *op.cit.*

[53] Callahan, John F. "F. Scott Fitzgerald's Evolving American Dream: The 'Pursuit of Happiness' in *Gatsby, Tender Is the Night,* and *The Last Tycoon*", *Twentieth Century Literature*, Vol. 42, No. 3 (Autumn, 1996), p. 379.

これまでの議論をまとめるならば、フィッツジェラルドはアメリカン・ドリームのあるべき姿として、物質的な成功に加えて、その側面に含まれきれなかった「幸福の追求」で意味されるところも捉えていたと言える。作者は物質的成功ばかりに傾いたアメリカン・ドリームを否定し、物質主義的な成功に加えて精神的な成熟を肝要に据えていたと推察される。作者はこのアメリカン・ドリームに可能性を見出していたことがわかる。

2 フィッツジェラルドがもたらしたギャッツビとフランクリンの対峙

(1) フランクリン的セルフメイドマンとしてのギャッツビー

第一章でジェファソンとフランクリンのアメリカン・ドリームとの親和性を指摘し、第二章ではジェファソンが示した「万人に開かれた」というドリームを否定したと述べた。しかし、その物質的な側面を除いた「幸福の追求」が指すところに可能性を見出したと述べた。ピジョンによれば、作者は初期、すなわちアメリカ建国期の夢 (early "dream")の善を彷彿とさせると指摘している[54]。そこにはフランクリン的なセルフメイドマンへの回帰が含まれると考えられる。本節では作者がいかにギャッツビーをセルフメイドマンとして仕立て上げ、またフランクリンを意識していたか、四点上げて指摘する。第一に物質的成功、第二に自己演技、第三に過去の修正、最後に自己改革である。

前章でギャッツビーの物質的な成功は作中の彼の描写を挙げて紹介した。その富は彼が自ら築き上げたものである。ギャッツビーは、ノーズダコタ州の貧しい農家の家庭に生まれ、十七の時に家や故郷を捨て新しい名、ジェイ・ギャッツビーを名乗り、ダンコーディのもとで再出発をする。貧しい生まれでありながら努力をして成功するという点でまさしく商業的セルフメイドマンであり、またフランクリン的セルフメイドマンがさす物質的成功の側面である。

---

[54] Pidgeon, John A. Pidgeon. "The Great Gatsby", *Intercollegiate Studies Institute Inc.*, Vol. 49, Issue 2 (Spring 2007), p.182.

フランクリンが提示した自己演技は、ギャッツビーが自らの出自を隠して上流階級らしく振る舞おうとするところである。「十七歳の頭で考えそうなジェイ・ギャッツビーを作りだし、その人物像に最後まで忠実だった」(159)とあるように、彼は自分自身のイメージを演じた。トムには否定されてしまうが、ギャッツビーの努力は明らかである。それは、第一章で取り上げた彼の住処や派手なパーティーはその富の現れである。また、作中でギャッツビーは *old sport* というフレーズを42回（本文においてはトムの返答等を含めると45回）使用している。ランダルは、それが 20 世紀初頭に英国の上流階級で使われていたスラングであると述べている[55]。当時プレップスクールの男子学生が上級生から同等または下級生に対して使用していた言葉であり、この表現を繰り返すことに上流階級に属した人になりデイジーを手に入れたいという内心の願望が表れていると言えよう。

また、デイジーとギャッツビーの最初に出会いは次のように描かれている。「さすがに巨万の富があるとまでは言わなかったはずだが、安定した基盤があるようには思わせただろう。デイジーに似たような階層の、おおいに頼りになる男だと見込まれて、そのままにしておいた。」(243) つまり、その時から彼は「虚偽の装い」(242)を通して、彼女に接している。自身の生い立ちをうまく隠している。また、第二章で彼の物質的成功が見られる描写を挙げたが、それらからもセルフメイドマンにおける自己演技がなされているといえる。

フランクリンが『自伝』を通して示したものの一つに過去の修正が挙げられる。彼は若き日の兄との衝突や金の使い方を「人生における誤植(erratum)」でだと回想した上で、成功さえ収めれば若き日の恥辱などは晩年になっていくらでも改竄して美化することができると考えていた[56]。それが彼にとっての自己形成でもあった。これはギャッツビーにもみられる。デイジーとトムとの夫婦としての生活を否定して、その五年の間もデイジーは自分を愛しておりその時代

---

[55] Randall III, *op. cit.*, p.248.
[56] 巽、前掲書、48-9 頁。

に戻ろうとしている。これは「過去を繰り返す(repeat the past)」ことに拘泥している。ニックがギャッツビーに忠告する以下のシーンでも読み取れる。

> 「デイジーに無理な注文をするのもどうだろうね」と、私はあえて口出しめいたことを言った。「過去を繰り返すことはできない」
>
> 「できない？」ギャッツビーには心外のようだ。「できるに決まってるじゃないか！」
>
> …「まったく元通りに直そうと思ってる」と言いながら、意を決したようにうなずく(179-80)

フランクリンが示した自己形成を意識していたことは明らかである。大野は時間の流れに逆行しようとすることは本来不可能であり、「過去を取り戻す」という試みを無謀だと指摘している[57]。フランクリンは兄との衝突を美化しているに過ぎず、決してなかったことにしているわけではない。経済的な成功を通して恋人を取り戻すなど過去を実際に書き換えようとしている点でギャッツビーはフランクリンを連想させつつも本質的には異なると言えよう。

次に、自己改革というフランクリン的なセルフメイドマンの要素が挙げられる。ギャッツビーの幼少期における愛読書『片足跳びのキャシディ』の裏表紙から読み取れる(282)。これはフランクリンの自伝のパロディであり、佐々木によればそれぞれの徳目に対応するようだ[58]。ここでフランクリンの『自伝』らしさを加えたこと自体が、作者がギャッツビーをセルフメイドマンとして連想させるものである。これらはフランクリンが作成していた週間予定表になぞらえ

---

[57] 大野真「【グレート・ギャツビー】における『夢』の二重性」『東京薬科大学研究紀要』第13号、2010年、12頁。
[58] 佐々木、前掲書、55-6頁。

たものであり、ここから青年時代のギャッツビーの自己改革への意志が表されている。禁欲的で勤勉な生活態度を理想としていたことが読み取れる。

スケジュール[59]

6.00 A.M.	Rise from bed 起床
6.15-6.30 A.M	Dumbbell exercise and wall-scaling ダンベルと壁登りの訓練
7.15-8.15 A.M.	Study electricity, etc 電気（など）の勉強
8.30-4.30 P.M.	Work 仕事
4.30-5.00 P.M.	Baseball and sports 野球その他スポーツ
5.00-6.00 P.M	Practice elocution, poise and how to attain it しゃべり方、落ち着きの練習
7.00-9.00 P.M.	Study needed inventions 生活に必要な発明品の研究

いつもの心がけ

		対応する徳目
1	No wasting time at Shafters or [a name, indecipherable] ＜シャフターズ＞や［反読不明な店名］で無駄な時間を使わない	勤勉または節制

59 「スケジュール」と「いつもの心がけ」の表は本文をもとに作成したものであり、「対応する徳目」は同上の文献を引用した。

2	No more smoke-ing or chewing もうタバコをすわない、かまない	節制
3	Bath every other day 一日おきに入浴する	清潔
4	Read one improving book or magazine per week 週に一冊は、ためになる本か雑誌を読む	勤勉
5	Saved $5.00 [crossed out] $3.00 per week 週に五ドル［これを消して修正］三ドルは貯金する	倹約
6	Be better to parents 両親への態度をよくする	誠実または正義

以上より、作者がフランクリン的セルフメイドマンを意識してギャッツビーを描いたことは明らかである。

(2) フランクリン的セルフメイドマンになり得なかったゆえの失敗

前節で作者がフランクリン的セルフメイドマンを意識してギャッツビーを描いたことを指摘した。それは、物質的成功、自己演技、過去の修正、自己改革に表れているとした。しかし、この四つめにあげた自己改革にこそ、作者はギャッツビーとフランクリンとの差を作り上げ、それこそがギャッツビーの転落の要因として作用したと考えられる。フランクリンが提示したものに比べギャッツビーのものは具体的であり実践が容易く高邁な理想と乖離すると佐々木は指摘する[60]。例えばフランクリンが示す「正義」は両親への親切に置き換えられていると述べて

[60] 佐々木、前掲書、56 頁。

いる。それでもさえもギャッツビーは失敗していたことは作中から明らかである。「優しく」と決意しながら、次のように彼は両親を否定する。

> 父母は農作業で暮らしていたが、一向にうだつが上がらず、落ち着かず、あれこれ空想をめぐらす息子としては、どう考えても、これが親なのだとは認めたくなかった。いまロングアイランドのウェストエッグに居を構える。ジェイ・ギャッツビーという男は、自らの理念を追い求めた結果の産物だ。もはや神の子としか言いようがない。その神のために奉仕する。(159)

彼は両親を認めず「うだつが上がらず、落ち着かず」(shiftless and unsuccessful)と否定をし、自身を「神の子」と信じてやまず、自身の過去を捨てる。十七の時点で彼は「両親への態度をよくする」という誠実や正義の実践に失敗しているといえよう。またフランクリンは内なる善(inner goodness)に重きを置いたことに対して、ギャッツビーはダンベル運動や壁のぼりによって自己イメージを高めることに重点をおいているとデッカーも述べている[61]。いつものこころがけにおいても、高潔な内面を養うというフランクリンに対して、ギャッツビーは自己の外面的な提示に重きをおいている。

作者はギャッツビーに徳目の実践を通して精神的なもの、「内なる善」が欠落していた。そのモラルの欠落は、フランクリンとの連想以外でも顕著に描かれている。作者はギャッツビーを「悪」と意図的に結び付けていると考えられる。彼の成金的な面にまつわるいかがわしさは、パーティに訪れた客も感じとっていた。「ドイツ皇帝の甥・従兄弟」(57)、「人を殺したこともある」(73)「戦争中はドイツのスパイだった」(74)であるという噂が立てられている。ウルフシェイムとの交友である。1919年のワールド・シリーズの賭博に関係したとされている。ギトムがギャッツビーを暴く際にも、ウルフシャイムの仲間であることを指摘している。トム

---

[61] Decker, Jeffrey Louis. "The Diminishment of the Self-Made Man in the Tribal", *A Forum on Fiction*, Vol. 28, No.1, (Autumn, 1994), p.63

は、上流階級にはそれにふさわしいマナーがあって、ギャッツビーが財を成したやり方自分たちの階級にそぐわないものかをほのめかすことで、デイジーとの争奪戦に勝利する。トムはギャッツビーが「酒の密売人(bootlegger)」であることを見抜いており、それを暴くことでデイジーを説得する。ギャッツビーは他にも様々な非合法的な手段で富を築いたことがうかがえる。例えば偽装株の売買だ。これは、ウルフシャイムとニックが対峙した時から推察される。証券会社で働いているニックに商売話を一切しないようにギャッツビーが仕向けている。ギャッツビーが殺された翌日のシカゴからの電話は、彼が証券の密売に手を染めていたことを示唆していると佐々木は指摘する。第二章で述べたように、ギャッツビーが築き上げた富は合法性、道徳性に欠ける。ニックを車で連れ出してスピード違反を警察に咎められた時も、彼は警察を丸め込んでいるような素振りでことなきを得る。

"Old sport"というフレーズも両義性を持つ。この単語は英国の上流との結びつきを印象付ける作用を持つとすでに述べた。しかし、このフレーズは「悪」とも結び付けられていると考えられる。グラハム、ヘッジスタッドによれば、"old sport"は 19 世紀中頃、ニューヨークの裏社会でよく使用されていた言葉でもある[62]。*OED3* によれば初出は 1905 年に発行された英国雑誌『パンチ』である[63]。しかしニューヨークの裏社会ですでに浸透していたと二人は指摘する。作品の発表から半世紀ほど遡るが、このフレーズはニューヨークの裏社会を牛耳っていたウルフシャイムを連想させる。また、トムに対して使用されていたのはホテルでの口論時、5 回であるが、トムはそれを激しく拒絶する。そのフレーズが自身やデイジーの対極である成金さ(new money)を象徴するためであり、トムにとってそれは非合法的なお金儲けの結果であるからだ。

---

[62] Graham, Elyse and John Heggestad. "The Term 'Old Sport' in *The Great Gatsby* (1925)", *Notes and Queries*, September 2018, Vol 65, Issue 3 (September 2018), pp.413-415

[63] "old sport n." *OED Online*, Oxford University Press, (December 2021), <www.oed.com/view/Entry/130955>. Accessed 2 January 2022.

“Old sport”というフレーズの使用は英国の上流階級という自己形成を支えるものでありながら、「悪」と結びつける作用をも担っている。

ギャッツビーの転落のもう一つの要素として、物質的成功への拘泥が考えられる。フランクリン的セルフメイドマンからその精神性、モラル性、すなわち「内なる善」を欠けさせた、商業的セルフメイドマンの否定である。

ギャッツビーの金銭的な成功は一見きらびやかであるものの、作者はギャッツビーの人物描写を通して、物質主義がどれほど虚しいものかを示している。また、消費社会が浸透していった1920年代に作者は、処女作『楽園のこちら側』の成功により、富と名声とを獲得し、時代のアイコンとなるが、彼は1920年に母校の大学総長J.G.ヒビンにそれを憂いた手紙を送る[64]。人生が無情だと悲観した内容であった。彼がいわば物質的成功を手にしていながら、その虚しさを悲嘆していることが読み取れる。

作中ではデイジーへの愛から読み取れる。ギャッツビーにとっての夢とはデイジーを手にすることであり、富を得ることはその一手段であったと前節では述べた。しかし興味深いのは、デイジーを手にするということは、彼女への純愛というロマンス的な側面だけでなく、それ自体がその由緒ある階級と肩を並べるという手段であったともみられる。デイジーの描写のされ方からそれがうかがえる。

> …不意にギャッツビーが、「金にまみれた声ですよ」…そうか。そういうことだった。あの声が上昇し下降し、鈴の音のようにも鉦の音のようにもなって、どこまでも魅力をまき散らすのは、いくらでも金があるからだ……白い宮殿の奥にいる高貴の姫君、黄金の美女……。(195)

---

[64] 岡本、前掲書、156頁。

デイジーの声が金の響きを持っているということをギャッツビーが加える。そしてニックの語りでは、彼女の声が「鈴の音(jingle)」と甲高い金属音になぞられており、お金の即物性が強まっている[65]。彼女の魅力をその由緒正しさと金の所有として描写していることから、デイジーは心情に宿る精神的なものではなく、富や上流階級の象徴という俗物的な意味合いでしかなかったと考えられる。

> 風邪ぎみと見えて、いつものハスキーな声がなおさら魅力を帯びていた。このときギャッツビーは、金の力をつくづく思い知らされた。財産があれば、青春と神秘をつかまえて保存しておける。着替える衣装が多ければ颯爽としていられる。そしてデイジーは、銀のように艶めいて、あくせく働く庶民階級の上に超然としていられる。(244)

彼女は、金、銀、そしてお金という言葉を用いて説明されている。作者は意図して彼女を金と連想させている。「いつものハスキーな声」は「金にまみれた声」であり、ギャッツビーが「金の力」を感じることにも合点がいく。デイジーの美しさが金に依拠していることが明らかである。ここから、彼女を手にしたいという思いの動機が、彼女への恋慕よりも物質主義的な夢の追求の一要素であることがうかがえる。

また、ギャッツビーがその階級の差異（すなわち物質的側面）に囚われていたことは緑の灯火の描写からも読み取れる。ギャッツビーは対岸のブキャナン邸の波止場に光る緑の灯火に手を伸ばす。「デイジーとはるかに隔たるギャッツビーから見れば、あの灯火はデイジーに接近していた」(150)とあるように、これは彼にとって夢や理想の象徴であり、すなわちデイジーであった。しかし、ここで興味深いのは、デイジーとの恋仲が再度始まればその緑の灯火はその

---

[65] 宮本文「緑の灯火と黄金の輝き —*The Great Gatsby* における貨幣とアメリカの夢—」『アメリカ太平洋研究』第 9 号、2009 年、163 頁。引用元では村上訳を使用しており jingle は「ちりんちりん」と訳されている。

意味を突如として失ったように描写されていることである。ギャッツビーはデイジーを手に入れたと思い、彼女と同じ階級に肩を並べたと錯覚する。「とてつもなく重大だった緑の灯火が、いまはそうでなくなったと思いついたのではなかろうか...夢幻の世界にあると見たものが、一つだけ夢ではなくなった。」(150-1)ギャッツビーは実際に巨万の富を築き上げており、催すパーティにはイーストエッグの住人も訪れていることもあり、彼の周りでは階級の差異はほとんど消滅しかかっていたはずだと宮本も指摘する[66]。

作者が否定したのは物質主義ばかりかられた夢の追求であり、それには本来アメリカン・ドリームにあったはずの道徳性、精神性が欠落していて内実を伴わない空虚なものであることを指摘しようとしたと推察される。

[66] 同上、173 頁。

考察・結論

第一章ではアメリカン・ドリームそのものを追究した。それはセルフメイドマンが意味するところであり、その起源にもアプローチした。万人の平等が認められたジェファソン的な理想、出自や階級によらず自己形成と自助努力を通じて成功を手にするフランクリン的なセルフメイドマンを提示したうえで、フランクリンが提示したものが物質的な意味合いだけでなく道徳的な側面を持つことも指摘した。続く第二章では『グレート・ギャッツビー』に焦点を当てた。ギャッツビーが物質的な夢を成し遂げたことを指摘した上で、富を得ても叶えられなかったデイジーとの未来、それが象徴する社会階層の固定が夢の破滅という側面を持つことを述べた。作者自身の階級意識が前景化され、その階級意識故に当作品はジェファソンが示した「万人は平等」というアメリカン・ドリームの虚偽性を表しているとされていることも確認した通りだ。しかしフィッツジェラルドはその夢を完全否定したわけではなかった。第三章では、作者の夢への二面的な態度を指摘し、作者が夢に可能性を見出したうえで込めた当作品の新たな解釈を提示した。作者は当作品を通して、アメリカン・ドリームが物質主義ばかりに駆られ、道徳性、精神性が抜け落ちたことを指摘しようとしており、フランクリン的セルフメイドマンに可能性を見出していたと論じた。

フィッツジェラルドはギャッツビーを通して商業的セルフメイドマンの破滅を描き、フランクリン的セルフメイドマンに見出した可能性を抽出した。一方、作者の他の作品においてもフランクリン的セルフメイドマンが成功することはない。ギャッツビーのスケジュールには20世紀的な要素（ダンベルあげや電気の勉強など）があり、その点においてフランクリンの時代と作品との時代の差異には気がついていたものの、作者の時代錯誤があったともいえよう。作者は、1920年代の商業的セルフメイドマンの膾炙に辟易としており、ジェファソン的理想やフランクリン的セルフメイドマンに共鳴しそこに可能性を委ねたが、これは作者のノスタルジーと捉えられる。作者が理想としていたものが1920年代においても実現可能だとみなしていたかに

は本論では踏み込めなかった。また、作者がフランクリンの提示したセルフメイドマンを意識していた一方、それはピューリタニズム(プロテスタンティズム)の倫理意識に基づくものであるという指摘も多く、カトリックの出自を持つ作者とその家系との親和性は疑念を残す。これらの課題を今後の研究に活かしたい。

参考文献一覧

1　一次資料

フィッツジェラルド、F・スコット『グレート・ギャッツビー』小川高義訳（光文社、2009）

---.『グレート・ギャッツビー』野崎孝訳（新潮文庫、1974）

---.『グレート・ギャッツビー』村上春樹訳（中央公論新社、2006）

フランクリン、ベンジャミン（『フランクリン自伝』松本慎一、西川正身訳（岩波書店、1957）

Adams, James Truslow. *The Epic of America First Edition* [electronic resource]. London: Taylor and Francis, 2017.

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. New York: Scribner, 2004.

Jefferson, Thomas. *Notes on the State of Virginia, edited with an introduction and notes by Frank Shuffelton.* [electronic resource]. New York: Penguin Books, 1999.

Jefferson, Thomas. *The Papers of Thomas Jefferson Volume 33 ; 17 February to 30 April 1801.* Princeton: Princeton University Press, 2018.

2　二次資料

(1)　研究書

明石紀雄『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念』（ミネルヴァ書房、1993）

岩崎健『アメリカ小説に見るアメリカの夢』（近代文藝社、1995）

ウッド、ゴードン・S『ベンジャミン・フランクリン、アメリカ人になる』池田年穂、金井光太朗、肥後本芳男訳(慶應義塾大学出版会、2010)

川上忠雄編『文学とアメリカの夢』（英宝社、1997）

巽孝之『アメリカ文学史　駆動する物語の時空間』（慶應義塾大学出版会、2003）

柳生望編・広瀬良一『アメリカ文学史の世界』(オセアニア出版社、1990)

渡辺利雄『講義 アメリカ文学史　東京大学文学部英文科講義録　第I&II巻』（研究社出版、2007）

---.『フランクリンとアメリカ文学』(研究社出版、1980)

Cullen, Jim. *The American dream : A Short History of an Idea that Shaped a Nation.* New York: Oxford University Press, 2003.

Curnutt, Kirk. *The Cambridge introduction to F. Scott Fitzgerald* [electronic resource] (Cambridge: Cambridge University Press, 2007)

Sternheimer, Karen. *Celebrity Culture and the American Dream: Stardom and Social Mobility.* London: Routledge, 2011.

Wilson, Edmund. *The Shores of Light : A Literary Chronicle of the Twenties and Thirties.* New York : Farrar, Straus and Young, 1952.

（2）研究論文

明石紀雄「フランクリンの宗教：その理神論と道徳的実践を中心として」『同志社アメリカ研究』第4号、1967年、3-20頁。

浅川友幸「ジェイ・ギャツビーの『オールド・スポート』とは何か？」『東洋大学人間科学研究所紀要』第21号、2019年、27-43頁。

井出達郎「F. スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』におけるケアと主人公——傷からのつながり」『東北学院大学論集』第102号、2018年、113-118頁。

内田勉「フィッツジェラルド文学と大恐慌」『学習院大学文学部研究年報』第63号、2016年、47-67頁。

大野真「【グレート・ギャツビー】における『夢』の二重性」『東京薬科大学研究紀要』第13号、2010年、9-15頁。

岡本紀元「Scott Fitzgerald の“double vision”について」『甲南女子大学研究紀要十周年記念号』第11,12合併号、1975年、155-168頁。

佐々木隆「『冬の夢』から『アメリカの夢』へ——*The Great Gatsby* を中心に——」『同志社アメリカ研究』第 21 号、1985 年、53-66 頁。

清水忠重「トマス・ジェファソンの共和制論」『神戸女学院大学論集』第 43 巻第 2 号、1996 年、19-33 頁。

清水忠重「トマス・ジェファソンの道徳的感覚」『神戸女学院大学論集』第 41 巻第 1 号、1994 年、1-23 頁。

高橋美知子「F. Scott Fitzgerald の作品における人種表象」『福岡大学研究部論集. A, 人文社会編』第 13 巻第 5 号、2014 年、107-113 頁。

竹腰佳誉子「ベンジャミン・フランクリンの成功と彼の印刷ネットワーク」『人間発達科学部紀要』第 6 巻第 2 号、2012 年、203-210 頁。

千代田夏夫「*The Great Gatsby* におけるアナクロニズム」『鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会学編』第 70 巻、2019 年、113-119 頁。

西平功「ベンジャミン・フランクリンの十三徳の成立過程とその内容に関する研究」『沖縄国際大学外国研究』第 11 巻第 1 号、2008 年、1-54 頁。

仁平有孝「F.S. Fitzgerald における“崩壊”の意味ついて(2)」『茨城大学教育学部紀要』第 25 号、1972 年、137-148 頁。

羽鳥修「ベンジャミン・フランクリンの『世俗主義』と『非世俗主義』—アメリカにおける近代的文化思想の起源」『駒沢女子大学研究紀要』第 13 号、2006 年、189-203 頁。

早瀬博範「ジェファソンは偽善者か？—アメリカ民主主義と奴隷制」『佐賀大学教育学部研究論文集』第 1 巻第 2 号、2017 年、21-32 頁。

宮本文「緑の灯火と黄金の輝き —*The Great Gatsby* における貨幣とアメリカの夢—」『アメリカ太平洋研究』第 9 号、2009 年、160-173 頁。

山中祐子「*The Great Gatsby* における色彩のイメージ」『広島修大論集』第 49 巻第 2 号、2009 年、213-225 頁。

山中祐子「*The Great Gatsby* にみる人物像」『広島修大論集』第 50 巻第 2 号、2010 年、151-175 頁。

Bewley, Marius. "Scott Fitzgerald's Criticism of America", *The Sewanee Review*, Vol. 62, No. 2 (Apr. - Jun., 1954), pp. 223-246.

Callahan, John F."F. Scott Fitzgerald's Evolving American Dream: The 'Pursuit of Happiness' in *Gatsby, Tender Is the Night*, and *The Last Tycoon*", *Twentieth Century Literature*, Vol. 42, No. 3 (Autumn, 1996), pp. 374-395.

Decker, Jeffrey Louis. "The Diminishment of the Self-Made Man in the Tribal", *A Forum on Fiction*, Vol. 28, No.1, (Autumn, 1994), pp.52-71

Graham, Elyse and John Heggestad. "The Term 'Old Sport' in *The Great Gatsby* (1925)", *Notes and Queries*, September 2018, Vol 65, Issue 3 (September 2018), pp.413-415

Hearne, Kimberly. "Fitzgerald's Rendering of a Dream", *The Explicator*, Vol. 68, No. 3, (2010) pp.189-194.

Katz, Stanley N. "Republicanism and the Law of Inheritance in the American Revolutionary Era", *Michigan Law Review*, Vol.76 No. 1, (1977)

Lehan, Richard. "Focus on F. Scott Fitzgerald's *The Great Gatsby*: The Nowhere Hero," *American Dreams, American Nightmares*, 1970.

Pidgeon, John A. "The Great Gatsby", *Intercollegiate Studies Institute Inc.*, Vol. 49, Issue 2(Spring 2007), pp.178-182

Randall III, John H. "Jay Gatsby's Hidden Source of Wealth", *Modern Fiction Studies,* Vol. 13, No. 2 (Summer 1967), pp. 247-257.

Samuels, Charles Thomas. "The Greatness of 'Gatsby'", *The Massachusetts Review,* Vol. 7, No. 4 (Autumn, 1966), pp. 783-794.

（3）オンライン情報

アメリカンセンタージャパン「アメリカ合衆国憲法」

<https://americancenterjapan.com/aboutusa/laws/2566/>. アクセス日：2020.12.17.

アメリカンセンタージャパン「独立宣言」

<https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/2547/>. アクセス日：2020.12.17.

Corak, Miles. "How *The Great Gatsby* Curve Got Its name", *WordPress.com* (4 December 2016), <https://milescorak.com/2016/12/04/how-the-great-gatsby-curve-got-its-name/>. Accessed 23 December 2021.

"American, a. and n." *OED Online*, Oxford University Press(1989), <https://www-oed-com.kras1.lib.keio.ac.jp/oed2/00007153>. Accessed 2 January 2022.

"American dream n. (also American Dream)" *OED Online*, Oxford University Press (December 2021) , <www.oed.com/view/Entry/6342>. Accessed 2 January 2022.

"old sport n." *OED Online*, Oxford University Press, (December 2021), <www.oed.com/view/Entry/130955>. Accessed 2 January 2022.

"self-made man n." *OED Online*, Oxford University Press (December 2021), <www.oed.com/view/Entry/175345>. Accessed 3 January 2022.